

三身法界の巻

無作の巻

目次

本	能頭所頭	一
本	門本尊	四
本	教の三位	七
本	迹一致章	八
本	迹二種身	一三
本	三性相望みて無性	一五
本	觀念極楽用心	一五
付	録	一七
		一一六

本迹

如來の三身云は觀普賢經に釋迦牟尼佛名毘樓遮那徧一切處、其佛往處名常寂光乃至是色常住法故、如是觀十方佛と。又、十方三世、常住不滅、周徧法界、一大妙色、四德三德具足十界依正三千形相、無盡妙用備はりたる不思議妙體を法身如來と云ふ。常住法則の故に法身と云ふ。常住法即毘樓遮那法身の意也、蓮師如是體を法身と云ふは色身を直ちに法身の體義を顯す。一大妙色即ち唯一不二、五大法界是れなり。此の五大法界中無盡妙理を具足して大虛即法身なり。地水火風の中にも無盡妙理具足して當體即ち法身なり。無常變幻の相即ち當體即中不思議妙色なり。妙色中に自然常住の智徳を具ふ。種々の顯照光輝。是を經に乃至般若波羅密と云へり。此智光の性徳を報身如來とす。報は性徳果報を云ふ。五智五眼、三智三徳、無量功徳、法身の體に備たる圓滿清淨果報なり。是果報積聚するを身と云ふ。此法身より無盡形相を縁に隨つて顯現するを應身とす。十界身土一切形相皆應身。所謂、或示己身、己常他身、他（一）

- 2 -

是なり。人身六根六識六塵に自然に天地法界と和合する法身の徳を具し、又天地法界の光照し、天地法界を莊嚴する般若解脫の功徳具足せることを、釋迦道場に於て開悟し給ひしが釋迦證得の三身なり。是の開悟を得れば一切人皆成佛なり。此三身は開悟の時始て得る者に非ず、人々生得の果報なるを、本有無作、無始久遠三身と云ふ。無作三身顯現するが壽量品の大意なり。

五大の實體と性徳と形相との三は天地法界自然の三身なれば、本地三身、法身所具三身と云ふ。人中開悟三身は時々隱顯し、屢々出沒す。人々各々の三身なれば迹中の三身、應身所具三身と云ふ。

一往然り。再往は人中五大が日夜天地に周流し、法界の五大が日夜身内に流入す。故に人中五大即ち法界妙體なり。法界五大が即ち一人の身體なる故に、人身と天地法界と性徳の同質なるのみにあらず、周徧無礙妙用常恒不二。是を行證得の毘樓遮那徧一切處とす。又一大虚空と金剛無礙の風輪と海水と天日と大地との五大和合して、一切の根塵識を顯現すれども、唯一人の色心根塵識を以て普く天地海日の大勝能を主宰し知見し、受用する故に、人は天上天下唯我獨尊の大徳を生得より具備す。復普く一切人一切法の功用を知見し、受用し、主領する果報の自然生得に具足の故に、一人即天地法界の福智莊嚴し、究竟體得せば、法界獨一の圓滿報身の妙體なり。又行者一身五大が周徧遍滿して顯現する所の一切依正萬物なる故に、皆是行者分身散體、無作普現の應用化なりとす。是即ち行者垂迹の身に即して無始來成覺、久遠質成の三身なり。又一人身上の天地法界の如く、人々各々に天地法界を攝得し、塵々法々中、又五大法界ありて、各々に天地法界を攝得し、又一人一塵法界に佗の無盡を攝得し又一人一塵の法界に佗の無盡法界を談す。一天地外、三世十方に無邊の天地法界あれども、唯一個の五大法界の理を出でず。故に盡十方が法界全一身、一念次第なり。

- 3 -

能顯所顯

能顯は五百塵點久遠始覺、所顯は無始本覺無作三身。臺家能顯始覺三身に就て別して報身を取る。我實成佛と云ふ故に、義（一）とは報身上法身を冥し、下衆機に契ふて應を起す。故に報身正意今家は所顯三身を正意とす。三身同なり。又或師は法身を正意とす。是所顯三身の正體、別して事の一念三千妙法蓮華、事具の實相顯體を正意とす。今家は能顯所顯共に所用。

此品の所顯は無始本覺三身なれども必五百塵點久遠の始覺に寄せて説く。其故は、
一、久遠始成談せざれば久遠弟子を論するを得ず。別頭人を擧げざれば別途の法を立つるを得ず。

二、單に無始を談する時は、法身常住の義を成す。三身無始と説とも聽者必性得三身の解を爲す。故に修得の非實を顯はすに由なし。若修得の果を破せざれば永く生佛隔異の見を破するを得ず。則無始の佛界非始の妙果顯れず。

三、又九界全く本果の家の九界なること顯れず。十界同體を究竟せず。
又佛界本より九界を具すること義顯れず。則ち事具三千究竟實相顯れず。是の故に必遠成の始覺に寄り無始を談するなり。

三、遠成を以て近成を破する故に、始覺虛なりと雖も而も不可全廢ことを知る。則本覺必ず始覺を借りて顯る。始覺必ず本覺に會するの妙旨顯ることを得。故に遠成の始を談す。非實非虛非如非異にして生佛因果を談す。

四、久遠始覺を論せざれば世々々々、三世益々物、非生現生、非滅現滅の佛なること顯るゝこと能はず。非滅現滅を談せざれば滅後の弘經持經修道の功用必常住の佛身を見るの義顯れず。即ち流通の大益隱没すべし。（是）最本門興起大事なり。必ず久遠始覺に託して無始本覺の能顯とする所以なり。

然るに文は久遠の始成を説くと雖も、無始本覺の義に統歸せざる時は諸佛に新古高下ありて隔歴の果となり、佛界尙融せず況んや九界に於てをや。豈に隔異を生ぜば横

又隔異し、一身一念、徧於法界の理に契はず。三千唯一の義成せず。又新成の佛は本化の弟子無く、分身の應化無く、多寶の願に契はず。化境の廣狹體用優劣永く不同を成じ、戲論の謗免れがたし。

三世諸佛、實體無二、蓮師が五百塵點、乃至所生三身、無始古佛と、十方三世唯是一身。

三身

三千同體、三諦即一、如の理と名づく。如の理來つて如の智に如ふ。法身如來如智ちんね來て如理を照す。報身如來、如智來れて如の機に如ふ。應身如來又天地法界の徳一人の身上に如し來り、一人の心徧く天地法界の事理を照見し、一人の三業よく天地法界萬物に應するの功用あるを無作三如來とす。

本門本尊

本門本尊、久遠實成釋迦佛、十界大覺…… 本有無作三身、無始常住、本尊とは無始已來天然法爾最勝尊。

一、法界自爾曼陀羅 十方三世 十界常住

二、靈山顯現曼陀羅 釋尊靈山虛空會に法華に大衆壽量の佛慧を信解し各々本位に住し、妙法蓮華福智圓滿の儀式、堂々威儀相。

三、道場莊嚴曼荼羅 滅後紙墨縁起の十界……顯に靈山虛空儀相を寫し、冥に法界自爾の尊貌を示し、正意は行者觀心の信解を發展し未代當路の大圓鏡。

四、行者心具……行者已體の三千諸法を具足、此一心十方法界に分身散體し互に融し互に即し不思議なることを顯示す。爲に、十界曼陀羅を圖す。其中央南無妙法蓮華經の七字は總體。左右諸尊は別體。

久遠實成本佛 十方法界を體とし(一)を相とし性ととし十界三千に事々物々此佛の身體に非るなし。本覺無作三身如來。十界衆生、如來眞如海に歸入すれば、皆悉く遮那の妙境、本覺の妙智に非るなし。故に今本時の娑婆界は三災を離れ四劫を出たり。常住の淨土なり。佛已に過去に滅せず未來に生ぜず、(所)化以て同體なり是已心の三千具足三種の世間なり。

宗教の三位(密禪師禪源諸證に)

一(イ)息妄修心宗、衆生本有佛性無明覆之不見故流轉、諸佛斷妄想故見性出離生死當知凡聖功用不同外境内心各有分別、故に師(一)教に依り觀心背境息妄念盡(一)昏晨時々拂拭塵盡明現 坐禪觀心遠離慣閑。

(ロ)密(一)依性說相教、佛見三界悉眞性、凡夫迷性無自體唯成觀及六度四攝等行、漸々斷煩惱所知二障、證二空眞如十地圓滿轉八識成四智慧眞如障盡成法身大涅槃
(ハ)厭穢欣淨宗、多念後生

三界六道苦毒充滿可厭淨土幸福莊嚴可欣、凡夫罪惡深重、阿彌本願を信じ正助二業を勤修せば、臨終佛の來迎に預て往生すれば品不退にして後に成佛。或は別時或は尋常尤も勤修すべし。此命終而後必往淨土。本門を論ぜず、迹門。

二(イ)毘絕無寄宗

凡聖等法夢幻の如し、都無所有本來空寂、今始て無に非ず、遂無の智亦不可得、平等法界無佛無衆生、法界亦假名、心現不有、〇〇法界無修無不修、無佛不佛〇有一法亦夢、無法可拘無可作、本來無事心無所寄方免顛倒

(ロ)破相教

因緣所生の法悉空、無所有衆緣に託して自性なきが故に、未だ曾て一法として因緣より生れざるものなし。

是故一切法一として空ならざるなし。凡そ所有法皆是虛妄、是故空中無色無陰入界

處無十二因緣無智無得無業無修無證生死涅槃平等如幻但不住一切無執無著而爲道行。

(ハ)純他力信心門

佛眞實圓滿無碍本願を信じ、佛の回向によつて衆生は但受動的に感情的のみにして佛の回向の外に自の回向に非ず、感情四感謝の外に意志的活動の要なし、無修無業信の獲得も宿善にして自己に關せず、佛の力の外に自己を用ひず。

客體は圓滿無碍なるも主體は消極的にして受動的なり。此心教宗三共に知と情と意との受動的にして活動的に非ず。

三、圓滿具德教

(イ)直顯心性宗

一切法若有若空皆唯眞性、眞性無相無爲體非一切謂非凡非聖非善非惡、然も體の用が能く種々を作るが故に凡と聖とを現する等、心性〇に二類

一に云能言動作〇曠苦樂等汝佛性是即佛、除之無別佛、此天真自然故に心を起して道を修すべからず道是心無斷不修任運自在を解脱と名づく。性不増不減何ぞ添補を假らん。但隨時隨處息業養神聖胎增長開發自然神妙此則眞悟眞修眞〇也。

二に、諸法如夢妄〇本寂塵境本空、空寂之心靈智不昧是汝眞性、任迷任悟心本自知〇宗衆妙門、萬行唯無念爲宗、無念〇惡淡泊悲智自然增長自然作佛。

(ロ)顯示眞心性教

一切衆生本覺眞心明々不昧、了々〇〇、之を如來藏と名く。無明翳が故に 自ら證得せず、生死に沈む。衆生具さに如來智慧を具し、妄〇執着して證得せず。之を開發すれば本來是佛。故に須らく行は佛行、心は佛心に契ひ、本に返り還源凡習を斷除して〇〇無爲にして自然、應用無碍を佛と名づく。

(ハ)圓滿具德宗

此宗義は阿彌即絕對無限の根底より開展して無盡の身心土を現じ一々の刹土にまた

阿彌の變化の身を出現す。絶對無碍の本體の内容には無盡の方面ありて、即ち地獄乃至佛界等或は物質態或は精神態に眞質妙質種々の方面に發展し、自己體内の人間方面より歸趣の光によつて精神を開展して攝取し、無限光壽の内容に歸趣せしむ。

人は本來あみの眞性を理性を中心として世界生理規定の肉を受くるも、又個人性をも受く、自己本來は絶對阿彌の中の我たるを意識し、あみの個體現としてあみの目的に順じて活動し、客觀界はあみを實現して行動するが即ち此宗の道なり。

導師は大庠擧つて曰ふ、彌陀の化身なりと。全く絶對阿彌の精神の個人實現に外ならず。然り大師も同じくあみの個體現として活動せり。何人もあみの分子としてあみを客觀界に實現せざる可からず。

厭欣宗の如くあみを遠く彼岸に過境的にあつて命終にあらざればあみの直接の關係を結ぶこと能はざる如きの超然主義は、あみの一分身のみを認めて未だ付て眞實の絶對のあみを意識せざるの致す所なり。

又純他力宗は受動的消極的にして、客體の圓滿無碍を立るは同一なるも主體は受動的消極的。觀經に云ふ。是心作佛、是、是佛、あみ心内の個人、あみの内容即ち自己の内容（統一する主體）

本迹一致章

謹んで大事因縁經の意を案するに阿彌陀如來に本地と垂迹との二身在ませり。本地身とは久遠實成本有法身、常住無量壽佛、始もなく終もなく、また絶對無限の靈體にして、不思議の威神力を以ての故に十方世界に徧滿し、一切の有情を無上眞實に安住せしめ給ふ。本有法身より迹を垂れて久遠劫に法藏比丘と現じ無量の大願を満足し、現に清淨國土に在まして十方の衆生を攝受し給ふとは、即ち本有法身より方便法身の法藏の身を示し、十劫始成は却つて本覺常住の本佛を顯さんが爲なり。經に無量壽佛

威神光明最尊第一諸佛の光明の及ぶこと能はざる所なり等は、是れ本迹一體の無量壽佛にして即ち法藏正覺の本地、十方三世一切諸佛の法王なり。

往生論註に如來に二種の法身あり、一に法性法身、二には方便法身なり。法性法身に由て方便法身を生じ方便法身に依て亦法性法身を出す。此二種の法身とは異にして分つべからず、一にして同すべからず等とあり。此法性法身は本有常住の無量壽佛にして方便法身とは法藏正覺の無量壽佛なり。本有法身より方便身の法藏正覺の身を出し、斯の十劫正覺は還て本有法身を顯さんが爲なり。方便法身が迷界に出て衆生攝取の誓を現はし、衆生を本覺に攝取せんが爲に顯されたるなり。

已に正覺の曉には本迹一體にして即ち一切諸佛の法王にして吾曹の本尊と仰ぐ所の如來なり。
迷子の爲に垂迹の身を出して衆生を本佛の許に還らしめ、父子相迎の機を與へんが爲に在ますと信ぜば、大慈父の仁慈仰ぎて頼むべきものなり。

菩薩 一 一種身 (一法身 二肉身)

菩薩とは觀音勢至文殊普賢等永遠の法身不思議の力衆生の信念に應じて顯現する處の身。心靈界に在して

肉身の菩薩、是に理(性)菩薩、感性とあり。理性の菩薩とは即ち自力の聖者一切衆生佛性あり理に於て已に本來是佛。幣帛に黄金を褻み土模に像を内る如し。
佛法、性惡全體造惡迷此理起惑造業輪迴生死。
初發心時便成正覺、所有慧身不由他、清淨法身湛然應一切本有佛性、煩惱即菩提、生死即涅槃と證得する時は衆生は本來佛なりと如實に知見する者は即是菩薩。

三性相望みて無性

偏計衆生性、依他世界性、絶對神性、

三展所生の衆生が内的生活を自我と執し、自ら自己の根底を悟らず、自然律と因果法に規定せられたる假和合の身心を自我と執し、實に我ありと執す。

入法二空とは此二性は相望めて空とす。

第三の衆生性を外道凡夫等は我は主宰國主の如し。自在なる故に輔宰能判斷する如し故に主是我體、宰是我用、所謂有情者、意生者、摩納縛迦者、養育者、數取趣者、命者、生者、士夫者、作受者、知見者、五蘊依此を計して我執と爲す。

法執とは法は軌持、能生物解、任持自性、故に謂凡夫外道小乘皆執。離心有定實法。

衆生は即人格なり實に命生ありて衆生は此五蘊と（ ）我を計する者皆五蘊に因る身と心と身は四大心は受（ ）心行（ ）と我今四大（ ）妄口身在何處此身畢竟無體和合爲相實（ ）幻化四緣假和合妄有六根、六根四大中外合妄有緣氣於中積（ ）似有緣相假名爲心此妄心無六塵則不能者。然らば身心假（和合を）我と計す。

觀念極樂用心

師子三藏意云、顯教云、極樂者、從是西方過十萬億佛土、佛是彌陀、寶藏比丘證果也、密教云、十方極樂皆是一佛土、一切如來皆是一佛身、無殊娑婆更無觀極樂、何必隔十萬億土、不離大日別有彌陀、又何寶藏唱覺彌陀哉、密嚴淨土大日（ ）位極樂世界彌陀心地、彌陀者大日智用、大日彌陀之理體、密嚴者極樂之總體、極樂者密嚴之別德、最上妙樂密嚴集之、極樂之稱彌陀之號起是、然彼極樂何處遍十方、觀念坐禪房豈在異處哉、如是觀時、不起娑婆忽生極樂、我身入彌陀、不智彌陀即成大日、我身出大日、是則即身成佛之妙觀矣、

附 録

三五

「あみだ佛に染むる心の色に出では、秋の梢のたぐひならまし」との宗祖の御道詠をおもはざるをえぬ秋の頃ほひ、しぐれにあふ毎に、野に山に黄に紅にますく濃厚を爲すを見るにつけても、私共に

大おみやの大慈光の爲に染まぬころの愚かさをいかにも慚愧に耐へざることに候。

其後は打絶て御無音にのみ過し、心には常にかくりつゝあれどもなかくに忙しなさにつひにおこたり候。皆様、大慈光裡にますく御すゝみなされ候ことならむと存じ候。

大みおやのじひの乳に育まれて、宇宙またとなき

おやさまの麗はしき御容に接して、親しく親子對面の出來うることの得まほしさよ。みおやのみむねはしばしも子にかゝらぬ時はなかりしも、子等がころの頑是なさ、只日

- 2 -

の前の徒ら事にいそしみて、みおやをおもふことの薄きは、まことにおもへば恥かし。世に親の手を離れたる子ほど憐なるはなし。全く親いままぬことなれば是非もなしみおやは子等をおもふ切なる、しばしも休らふいとまなきに、そのみむねを御惱まし申ことの勿體なさよ。大みおやのみむねをやすめ奉らん爲に、常にみむねにあることを表はして、聖名を稱へんことをこそ。

三六

によらいさまはじひのおやさまであるから、よるもひるも、いつでも、かわゆい子であるわたくしらを、おまもりなされてござる。

このによらいさまの、じひのおすがたを、ころにわすれぬように、をもひなされよ。ぜんどさまは、をしへてくださった、如らいさまはうはしいおすがたにて、光みやう、かくやくとして、つねにわれをてらし、みとほしてござるとおもふてをれとくうちうにござつて、われをみとうしてくださると。またもくぜんにいますとをしへられた。

がんと大しは、いつでもくうちうに、によらいさまを、をがんでをられしことを、おかくれのおほせられた。くわんのんさまの、おつむりに、によらいさまをわすれずにおもふて、をるころを、かたちにはあらはしたのである。

あなたも、このおすがたををがみて、いつでもくうちうにござるようにおもうてをるといつでもおやさまのじひのおすがたをわすれぬようになります。木とうに、ほんぞんさまをあんちしてをくのは、人のころにも、いきたによらいさまを、わすれぬように、ころに、あんちしてをけといふことを、をしふるための、ほんぞんさまでござる。

ゑしんそうづは、

ぬればゆめ、さむればうつつ、つかのまも、わすれがたきは、みだのおもかけ。

- 1 -

- 8 -

とくほん上人とくほんじゆうじんは、
をにもでよ、じやもでよ、でよと、せめだして、すましておけよ、あみだほとけを
とよみなされた。

三七

あなたのつよいつよい一しんで、によらいさまをおしたひなさるのはほんとうにふ
かいのです。あなたが、ねてもさめてもおやさまをおしたひ申すのは、おやさまも、
やはりあなたをふかくあいしてください。

しうきやうしんの、ふかいかたは、ほとけさまを、ねてもさめてもわすれられぬほ
どこひしいのです。それでもおがむことができぬと、こころがくるふほど、こひしく
なるのです。ほとけさまをふかくおしたひ申す、むねにつもりつもりてくと、たと
へばいどからがすがふきでるのが、たくさんこもりても火をつければよいが、火をつ
けぬとがいをするとおなじく、ほとけさまおもひの、がすが、むねに一ぱいになると
こらみやうのひがつかぬあひだは、じつにくるしむのです。あなたのむねのうちに、
こもりこもりて、くるしいのは、どうじやうに、たへませぬ。どこまでも、あなたの
こころが、おひかりであかるくなりて、やすくひぐらしでできるようにしてあげたいの
です。

あなたのつよいつよい一しんに、おひかりがつけば、てんりきやうのおみきさまの
ような、ふかい信しんじんしやとなるので、あなたのその一しんに、十ぶんにおひかりの
ひがついたならば、たくさんひとにも、しんこうをわかるようになるのです。ます
ますたのもしいのです。くるしみのつよいほど、おひかりがええますれば、ありがたい
のも、ふかくかんずるのです。あなたは、一しんがつよいだけ、おもひのがすが、む
ねにこもると、くるしいのです。

あなたのだいぢのいのちをたいせつにしなされ。このごろはおぐあいいかゞであり

ます。あなたがそれほどに、おやさまをおしたひ申して、それがためになるしんでを
るこころをば、いちにちもはやく、おやさまのおじひをもつて、くるしみのなから、
すくひあげたいとおもひます。

あなたのおやさまおもひのがすが、おほいだけ、ひがつかぬうちは、くるしみがふ
かいのです。そのかはり、ひがつきますれば、りつばなしんこうとなるのです。

びようきになんとなつてはいけません。これからいきたかんのんさまとなつて、一
しんにおやさまにおつかへ申して、はたらくみになるのです。あなたは、一しんつよ
いだけに、おひかりがえないといのちをちぢめ、みをくるしめるのです。あなたは、
どこまでも、おひかりをうけないとおふないのであります。

それほどに、おやさまをおしたひ申すこころを、どこまでも、おたすけ申しますか
ら、けつして、いのちをちぢめたりこころをくるしめることはやめなされ。

おやさまから、たまはりし、いのちをたいせつにしなればいけません。どんなこ
とでもとげぬことはありません。

三八

すべてを大おやさまにおまかせ申しあげて、あなたのおほしめしにかなうように、
おねがひ申し候ねがひまうらなう。

人げんかいにだしていたゞきて、こんどの大だいじをとこそねては、また三あくどう
のやみのなかにおちては、いつまた、大おやさまのおじひにあづかることか、とても
ふたたび、じひのみひかりに、あふことはできぬ。いかなること、大おやさまにお
すがり申して、こらへるやうになされ候へ。

いまに、わがにほんの人々が、大おやさまのおんと、おほしめしとをしらずして
おやさまの、かうみやうを、しらずして、みなやみのなかに、おちてしまうから、一
しようけんめいになりて、大おやさまの、おほしめしを、よのひとくにしらせなく

てはならぬ。いのちにかけて、つくさなくてはならぬことがあるではありませんか。

三九

うけたまはれば、またたいそうごしんばいなことができましたさうでわたくしもしんばいしてをります。

によらいさまをおたよりにして、どんなことができて、ますく、によらいさまをちからにしてをれば、つひには、やすらかなみちがついてきます。人げんの一生は大じであるから、一にちでも、むだなひぐらしをせぬように、おねんぶつを申して、によらいさまの、おじひのふところすまいであることを、わすれぬようにしなされ。

四〇

とかく、しやばくがいのことなれば、そのあとく、さまざまのことがわきだしてくるから、それにつけても、ただく大おやさまをたより申すほかに、みちはないと存候。

もはやことしもわづかになりてきました。おんちでは、もうゆきがふりはじめたのでせう。大みおやの、大ひの、いとあたたかな、ふところのなかに、こうめうのひぐらしなさるゝやうにわがはしく候。

四一

そののちはおぶさたいたしてすみませぬ。このごろはおからだはいかゞでありますか、おだいになされませ。はやくおたつしやになつて、大おやさまのをほしめしよの人びとに、ひろめるようにしてほしく候。

よはむじやうにて、時のうつりゆくことはすこしもとまつてをらぬから、どうか大おやさまのをじひを、一人なりともおほくのひとにをよぼしてください。

六どうのなかに、人げんに生るゝことはよいでない。たとひ人げんにうまれてもぶつぼうにあふこともなかくかたいことであると、おきやうにといてある。また、ぶつぼうにあふても、いくらきつても、大おやさまをほろとうにおやさまとおもふておやこのなのりあひが出て、おじひのふところすまいとなり、またおじひのちぶさを、あさな夕なにはぐまれて、いつでもおやさまとはなれぬなかなといふことはよほどよりはしゆくいんがふかくなければえられぬことですよ。

また、しゆくゑんの、とほいひとは、あみだによらいと申あげるかたは、とほいく西のあなたにましまして、しんでゆかなければ、御じひをかふむることはでまぬとおちふてをるひともある。

ぜんどう大しは、によらいさまと、ねんぶつしゆじやうとの、あひだには、しんえん、ごんえん、ぞうじようえんと申して、三つのふかいくちかいくしたしいくつよいくごいんねんがありて、きつてもきれぬ、はなれたくもはなれられることのできぬ、あいだがらであるとおふせられてある。

ほんとうに、いつでもく大おやさまの、あたたかなおじひをはなれて、どうしてわたくしどもの、しんこうのいのちが、つなぐことができませう。なくこそ、はのちゝは、くちのなかにうけながら、それともわからぬのは、このあいだうまれたばかりの、あかんぼうである。

大おやさまの、じひのちゝを、いたゞきなながら、それともしらす、みふところのなかにゐながら、左ともおもはずして、をるのはわたくしどもである。

あさばんに、むりやうじゆによらいの、おかうめうの、とくをさんだんして、あなたの光めうのなかに、このよながら、おやこの、なのりあひができる、ばかりでなくますくおじひにはぐまれて、しんこうしんが、おほきくなりて、じぶんばかりではなく、よのすべてのきやうだいしうに、おやさまをしらせ、まつたくきやうだいのしんじつが、あらはれてくるように、どうかして下され。

四二

うけたまはればこのころは大きにかいほうにて、はたけのおしごとみなされ候とのこと、よろこばしき事に候。あさひののぼるすがたにも、また、そらをとびゆくものなかにも大みおやのふかしぎの御はたらきのほどをしんじられ候。何はともかく大みおやの御めぐみが、つねにこのみにふりかゝりあることを、有がたくおもふてよろこび、たとへこのよのいちはかぎりありても、大みおやよりいたゞきたるいのちのかぎりなきをよろこび、ねてもさめても、大みおやのありがたきことをおもふては、しやうみやうし、たゞ、

大みおやとはなれぬやうに、念佛いたして、日を暮し夜を明かすことがありがたくぞんじ候。

四三

このごろはいかゞおくらしなされ候や。

大おやさまはふかい〜おじひにて、しばしもひまなく、こをあはれみたまひてござることをわすれなされて、そうしてゆめまぼろしのやうなことなんぞをおもふて、ひをくらしをつたつたのでは、おやさまにめんぼくありません。

むのう上人のおうたに、
うちむかひみなはよべどもよそごゝろ
てらすほとけのかたぞはづかし

このころは、なむあみだぶと、あなたのみなをよぶから、あなたは、をう〜とよろこび、じひのまなこをそゞぎてみたまふのに、なんのころはほかのことをおもふて、あなたにはようはありませぬといふようなかほをしてをつたつたのでは、ほんとうにあなたにたいして、はづかしいといふことなのです。とまれ、よろづのことは、すべてを、大おやさまにおまかせして、そうして日々をすることが、みんな、おやさま

からの、おほせのつとめとおもふて、よろこびいさみて、つとむれば、おやさまのおほしめしにかなふ。おやさまを、およろこばせ申すことは、やはり、じぶんもよろこばるではありませぬか。

かなしいことでも、やはり、おやさまをたよるごほうべんと存すれば、やはり、ありがたきことになる。をこつたり、ないたりしてはいけませぬ。おやさまにきまりわるいでせう。

四四

さて何れ免まれ如来さまの御じひがますます〜世の人々にしらせまほしく候のみ。それでも到る處に御じひをよろこぶ人々の追々に出来ることはまことに悦ばしき事に候。

何れ御地にいたりて種々また申上べく候。

四五

このごろすこし、すゞしくなりました。
おからだのごようすはいかゞであります。

ひさしく御ぶさたいたしました。
なにごとくも、みなゆめのみであれば、たゞ

おやさまのおじひをおもひて、御ねんぶつをとなへ、それから、じぶんでありがたいとおもへば、またよのひと〜にも、御わけ申して、ともに〜よろこび、ともに〜むようになれば、やはりありがたさますますむように相なり候。いづれ御めにかゝりしうへにまたおじひの御はなしをいたしませう。

四六

おてがみかたじけなく候。

うけたまはれば、ごいんきよさま、ついにごせんげなされしとのこと、じつにむじやうの風は、いつ何時たれのみのうへに、ふきくるかわかりませぬ。せんじつは、よほどさくねんとはかはりてはざるものの、それでもかへりにあふことのできぬみの上になるとはおもはざりし。

らうしやうふちやうなれば、いつのあらしに、わが身ふききゆるかとおもへば、いのちのとほし火も、たのみなきものにて候。

さればこそ、

ねてもさめても、はなれてならぬのは、大みおやの御じひのみにて候。

御じひのふところすむ身は、それでもあんしんなものにてあり候。あなたも、申までもこれなく候へども、大みおやのじひのふところにある身、つねに、じひのちぶさをふくめらるゝ稱名を、はなれぬようになされたまへ。

昭和七年六月十三日 印刷
昭和七年六月十五日 發行

誌代郵税共
年二圓

編輯兼 山崎 辨成
發行人

印刷人 小林 七太郎
牛込區早稻田鶴卷町四〇三

印刷所 靜文社印刷所
牛込區早稻田鶴卷町四〇三

東京市小石川區水道橋二丁目四十四番地

ミオヤのひかり社

振替口座東京六六八五一番